八月のマルクス

◉第45回江戸川乱歩賞受賞作

新野剛志

Shinno Takeshi

八月のマルクス

◉第45回江戸川乱歩賞受賞作

京工业学院图书馆
藏书章

新野剛志

Shinno

N.D.C 913　326p　20cm

八月のマルクス

一九九九年九月九日　第一刷発行

著者　新野剛志
発行者　野間佐和子
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一／〒一一二―八〇〇一
電話　（〇三）五三九五―三五〇五（編集部）
（〇三）五三九五―三六〇二（販売部）
（〇三）五三九五―三六一五（製作部）
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　黒柳製本株式会社

定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第二出版部あてにお願いいたします。本書の無断複写（コピー）は著作権法上の例外を除き、禁じられています。
©Takeshi Shinno 1999 Printed in Japan

ISBN4-06-209857-1　（文2）

目次

八月のマルクス—— 3
江戸川乱歩賞の沿革及び本年度の選考経過 322
江戸川乱歩賞授賞リスト 323
第四十六回(平成十二年度)江戸川乱歩賞応募規定 325

装幀　辰巳四郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

八月のマルクス

1

猫は目だけを動かし、視線をよこした。

白目もないくせに小癪なまねをする。私は猫がいすわるドアのステップに片足をかけた。ここのところ三回に一回は見かける。斜めから射すスポットライトが温いのだろう。師走ももう間近だった。

私の両足がタイル敷きのステップに乗っても、ほとんど黒に近い茶のぶちはぴくりともしなかった。バー、ホメロスの重い一枚板のドアをゆっくり開けると、ようやっと猫らしさを見せ飛び退いた。相変わらず鈴の音はない。野良猫が人を人と思えなくなったらおしまいだ。もっとも猫に人と思われなくなった私の方が終わっているのかもしれない。

早くも定位置に戻ろうと滑らかな体をドアに押しつける野良を横目に、背をこごめたまま私は酒場に足を踏み入れた。

まだ六時を回ったばかりだが、カウンターの一番奥に先客が一人いた。自分の定位置を奪われようと、私は猫ほども主張する気はなかった。

カウンター六席、三テーブル十二席のバーを一人で切り盛りするマスターが、目で挨拶をくれた。それに応えて軽く頭を下げると、マスターは先客にチラリと視線を振った。私はそれを、私の定位置が塞がっている詫びと理解した。二つ離れた席に目星をつけ、板張りの床を進んでいくと、先客はこちらへ体を向けた。

私はすぐに反応できなかった。心に封がされたままだったことを、改めて思いしらされた。

恥ずかしげもなく満面に笑みを浮かべている。Tシャツの上にナイロンのトレーニングスーツを着ただけなのは、車で送り届けられたからだろう。来るぞと予想する間もなく大袈裟に両手を広げた。

「雄二、久しぶりだ。元気そうだな」

立川誠だった。私の元相方。日本を代表する笑わせ屋。

「こんなところで何してる」

私のぶっきらぼうさは許される範囲だろう。何しろ五年ぶりなのだ。それまでの八年間、ほとんど毎日顔を突き合わせていたことを考えれば、久しぶりと応えるだけでは埋め合わせられないものがある。しかし立川はブランクを微塵も感じさせずに続けた。

「こんなところって言い方はまずいんじゃねえか。なあマスター」

マスターはお愛想の笑みを浮かべ首を横に振った。私は軽く頭を下げた。マスターは冗談に巻き込まれるのを好まない。本人が言ったわけではないが、私がここに通い始めて四年、そんな姿を見たことはなかった。

「笠原さん、今のは聞かなかったことにしてあげますから、早くお掛けなさい」

カウンターに軽く手を置き冗談めかして言った。

立川は一体何時から来ていたのだろう。マスターに対する四年のアドバンテージがすっかりなくなっていることを自覚しながら、隣のスツールによじ登った。
「何してるとも訊いたな。じゃあお前はここに何しに来たんだ。酔うためだろ？」
私は簡単な質問にもかかわらず、答えられなかった。ただ見つめ返すと、立川は意味を取り違えたようで満足げに頷いた。
「だろ。俺も酔いたくなった。思い切りだ。そんなときにはお前がいれば安心だ。マスターも今日は酔っ払っていいと言ってくれてる」
立川は同意を求めるようにマスターに向けて顎を上げた。マスターは了承した印に、半分あいたグラスにうやうやしくウィスキーを注いだ。オンザロックだった。
酔い潰れた立川の世話をやいたのはもう十数年前、学生時代の話だ。通う大学は違ったが、コント中心の学生劇団の先輩だった立川を、担いで帰ったり、絡み絡まれたりを助けたり、一緒に殴られたりしたことが数知れずあった。その後立川はお笑いの道に進んだ。そして当時、座付作家が書いたギャグよりも採用されることが多かったギャグセンスを見込んで、私に声をかけたのだ。私が二十一、立川が二十三のときだった。自分たちと同じ教員になるものと信じていた私の両親は猛反対したが、親の言うことを素直に聞く年齢はとっくに過ぎていた。
立川はもう酔いが回り始めているのだろう。腺病質を思わせる青白さがそれを物語る。
「べろべろになる前に答えてくれ。どうして俺がここに来るって知っているんだ」
「相変わらず理由を知りたがる奴だ。人がどうして笑うかなんて考えたってわかりゃしないぜ。俺たちが笑わそうと思ったときに観客は笑うんだ」
立川は奇妙な退行現象を起こしているようだ。まだテレビの仕事も少なく、ステージを中心に

ネタをやっていたころ、同じ台詞を吐いたことがある。テレビ中心になってからは、客の反応より視聴率が主な指標となっていた。

「それじゃあ俺が観客になるから、今の質問に笑えるように答えてくれよ」

隣の元相方は目を見開き、息を詰まらせたような顔をした。頭をフル回転させているときの、鶏を思い出させる顔だ。

「面白くはないがうまい突っこみだ」

立川は息を吐き出しようやく言った。

「野島貴晴から聞いたんだ。レコーディングで東京に出て来ているらしくて、このあいだたまたま六本木で会った」

笑わせることは諦めたみたいで普通に答えた。

野島は現在私が唯一付き合いのある芸能界の住人だ。元ロックバンドのボーカル、今は人のために作詞作曲を手がけているが、生活の拠点を蓼科の山の中に置き、たまに下界の風に当たりに来るだけの半仙人だった。私は以前、数ヵ月野島の山荘に身を寄せていたことがある。野島は年に数回私のところにやって来る。ホメロスにも何度か連れて来た。

立川はたまたま野島にここのことを聞き、気紛れで訪ねてみる気になったというだけなのだろう。

「なぜ俺たちがここにいるか憶えているか」

私は、ウィスキーをちょろちょろと流し込む立川の横顔を睨んだ。

トレードマークの鷲鼻に目がいった。かつては見慣れたもののはずだが、久しぶりに間近に見ると、素人なみにありがたく思えてくるから不思議だ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「そうだったな、悪い悪い。世の中皆が酔っ払っちまえばすべて丸く収まるもんだ」
立川が遠巻きに眺めていたマスターに目配せすると、すぐに私のグラスが用意された。立川はすかさず自分のボトルからウィスキーを注いで寄こした。立川は親指にこぼれた滴を、音をたてて吸った。マスターは、公園で遊ぶ子供を見るような目で、その様子を眺めていた。マスターと立川の間に阿吽の呼吸が存在するらしい。立川は本来とっつきのよい人間ではないが、必要があればいつでも人を魅了する社交性を発揮することができ、またそのときを見極めるのに長けていた。もともと毒舌、強面で売る立川だから、小出しにされる屈託のない笑顔や脆さなどに人はすぐ惹きつけられてしまう。だからこそ私とのコンビの時代を含め、もう十年近くもお笑い界の頂点の一角として君臨し続けられるのだ。
「雄二、アルコールは眺めていても何ももたらしちゃくれないぜ」と立川は言った。
体に入れたところで私には大して効果がないことを知っている。私はグラスを取り上げ、半分をぐいと空けた。
「どうだ？」
立川は控えめな笑みを浮かべた。
うまかった。
私はまじまじとグラスの中身を見つめた。いつもと変わらぬ琥珀色。なのに五年ぶりに舌でアルコールを感じている。元相方との再会が、味覚中枢の一部を甦らせたのだろうか。私は続けて残り半分を飲み干した。
立川は公約通り酔い潰れ、私に八割の体重を預けてぐにゃぐにゃの足を惰性で送り出してい

た。元相方は潰れるまでにさんざん周囲の客を沸かせた。たぶん開店以来一番の賑わいであったろう。

ホメロスは下北沢の茶沢通りの北、東北沢寄りに位置していた。店といえばクリーニング屋や小料理屋があるぐらいで、他はマンションや民家が立ち並ぶ人通りの少ない場所である。それでも下北沢の絶対的な酔客の多さからいって、そこまで流れてくる人間は出てくるものだ。そしていったん来店してしまえばその静かな穴場的立地に常連となる客も多かった。珍しい酒など置いてないし、特定のジャズやロックを聴かせるわけでもないので客層はまちまちだ。ただマスターの口数の少なさを反映し、静かにグラスを傾ける者が多かった。私もその一人である。私の場合、繁華街から流れてきたのではなく、東北沢駅に近い私のアパートから繁華街に向かうと一番手前にある飲み屋がホメロスだったというだけである。グループ客を排除しているわけではないから店内が騒がしくなることもあるが、今夜のように立川を中心に知らない客同士が盛り上がることは私の知る限り皆無であった。マスターもそんな賑わいを結構楽しんでいたので、私はほっとしていた。

解せないのは立川である。番組の打ち上げや芸人同士の飲み会では職業意識からはしゃぐこともあるが、プライベートでは概しておとなしく飲み続ける男だった。無論その気になればいくらでも周りを楽しませることはできるのだが、スポンサーがいるわけでもないし、今晩は気を遣う相手もいなかったのに、最後にはひどく声まで嗄らしていた。五年の間に無償のサービス精神でも芽生えたのだろうか。五年あれば人はいくらでも変わることができるだろう。

私たちは結局五分の道程を二十分かけて帰った。相方は途中一度道端に反吐を吐いた。大物お笑いタレントの吐瀉物となればいくらかの価値があるだろうと、気兼ねなく存分に吐かせてやっ

た。ジャージ姿があまりに寒そうで、私のレザージャケットを着せてやろうとしたが、そのままの方が酔いが醒めると、嗄れてはいても案外しっかりとした声で拒否をした。
茶沢通りを東北沢方向に進み、北沢公園のひとつ手前の道を入ってすぐ左にあるのが私のアパート、サンライトハイツだ。私の部屋はあいにく二階だった。半ば引きずるように相方を部屋の前まで連れてきて壁にもたれさせる。黒地に金の縁取りと硬いバネの演出により、高級感と重量感を漂わせようとするドアに対して、私は今初めて悪態をつきたくなった。爪先で開いたドアを必死に支え、両手で相方の体を壁からもらい受けて肩を先に狭い開口部へ滑り込んだ。
部屋の中は集合住宅特有の暖かさがあり、相方に訊いてもちょうどいいというので暖房は入れなかった。
「水をくれ」
ダイニングに置いたソファーに座らせると相変わらず嗄れた声で言った。
私の部屋は畳の六畳間とダイニングキッチンのふた間である。ダイニングに応接セットを置き、あとは最低限の家電製品を並べただけのシンプルな生活だった。男の一人暮らしとひと目見ればわかるような部屋だ。
「烏龍茶もあるけど」
「いや、水がいい」
立川は無言で受け取ると、口をぽかんと開け、落とし込むように喉に流し入れ始めた。
「こうすると気持ちいいんだ」
立川は口の端のこぼれを拭いながら言った。
日ごろそうしているということだろうか。

「最近酒はよく飲むのか」
「めったに飲まない。言ったろ、だからお前のところに来たんだ」
「そして五年分ぶちまけてくれたわけだ」
私の部屋で唯一値の張るユーグ・シュバリエのソファーに沈み込んでいる立川は、背もたれに腕を回して滑らかな革をさすり始めた。
「酒を飲みたかっただけだが、能天気な気持ちで来たんじゃないぜ。俺に会うことでお前がいやなことを思い出して辛くなったりしないか心配だった。それでもホメロスに行こうと決めたのは、今会っておかないと一生会えないような気がしたからだ」
「今？」
今とはあまりに曖昧だ。立川の指す今がどれほどの幅を持つのか見当がつかなかった。
「野島から聞いて思い立った今だよ」
立川は、ぱんと背もたれをたたいて正面に立つ私を見上げた。
「どうしてお前はどうでもいいことにこだわるんだ」
自分でもわかるわけがない。私は肩をすくめて首を捻った。立川は鼻で笑った。
「言い訳じゃないが、会おうと思ったことは何度もある。連絡を取ろうとしたんだ。不義理でお前を放っておいたんじゃない」
「わかってる。あんたからの手紙はちゃんと受け取っているよ。だが開けてもいないし返事を書こうとしたこともない。俺の場合は不義理でそうしたんだ」
立川は、そうかとだけ言った。適切な言葉だ。再会が遅れたことで失われたものはたいしてない。

「なあ、お母さんに線香あげさせてくれないか。結局一度も手を合わせていないんだ」
「ここに仏壇はない。家に置いてきたんだ」
「家はおやじさんに？」
「ああ、兄貴夫婦が面倒見てる」
六年前に買った桜上水の家は兄に譲っていた。年老いた父親を押しつけるための代償として高くはない。また立川は、そうかと言ったが、今度はいやなものを見てしまったような顔をした。
「シャワーでも浴びるか。すっきりするぞ」
「いや、もうちょっと酔いを醒ましてからにするよ」
「それじゃあ俺が浴びて来る。自由にしててくれ」
シャワーを浴びて戻ってみると、立川は私の言った通りにしていたようだ。流しの下にしまってあったウィスキーのボトルを引っぱり出し、一人手酌で飲んでいた。元がどれくらいあったか定かではないが、半分ほど空いていた。
「明日は何時から仕事なんだ」
「入りは十時半だ。大丈夫だ、仕事に影響させたりしないよ」
立川はテレビでのいいかげんそうな言動に比して、仕事に対する姿勢は真面目だった。酔いが残った顔でスタジオ入りしようなどとは考えていないだろう。
私はセンターテーブルを挟んで立川の正面の床に座った。相方は用意してあったグラスに酒を注いで私の方によこした。
立川は黙々とグラスを口に運んだ。気まずさを通り越した沈黙が妙に心地良い。二人きりで飲むことなどコンビを組み売れるようになってから絶えてないことだった。

立川が口を開いたのはそれから一時間も経ったころで、もう二時を回っていた。
「俺、癌なんだ」
立川は左右にグラスを揺すり、中身に渦を作っていた。魅了されたように、それを一心に見つめている。
「治るんだろ」
そうでなければ、どう言葉を繋げればいいかわからない。
「医者は治らんと言ってるし、俺もそれを受け入れている」
三十六。その数字が私の頭に浮かんだ。立川は私より二つ上なだけ、まだ三十六歳だ。私は立川の顔から目をそらすことができなかった。そらしてしまえば憐れんでいると受け取られる。しかし見続けるのも、目に表情が表れそうで怖かった。
「そんな目で見るな。俺は気にしちゃいない。もちろんわかったときは平静じゃいられなかったが、今は人生を区切られて良かったとすら思える。いつ死ぬかわからない人生を送るより、やりたいことを絞れる」
グラスを再び口に運び、中身をふた口で空にした。
「酒はいいのか」
「良くはないが、今日だけだ。大した影響はない。言ったろ、やりたいことを絞っているのさ」
私は立川の空いたグラスにウィスキーを注いだ。深く考えたわけではない。ただ、たった今相方に何かしてやれることはそれぐらいしか思い付かなかったのだ。
「すまん。こんな話をするつもりで来たんじゃない。不健康自慢は業界の悪い癖だが、こればっかりはあの世界の誰にも話せん。お前なら利害がないから聞き流してくれると思った」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com